二〇二四年度　卒業論文

離島寺院の研究
―山口県下関市六連島西教寺の現状と展望―

L２１０００４
東　大悟

目次

序論 …… 1
本論 …… 2
第一章　六連島の概要と歴史 …… 2
第一節　六連島概要 …… 2
第二節　六連島の歴史 …… 3
第二章　西教寺の概要と歴史 …… 5
第一節　西教寺概要 …… 5
第二節　西教寺の歴史 …… 2
第三節　妙好人お軽同行 …… 8
第四節　考察 …… 11
第三章　独自アンケート／質問紙を用いた調査 …… 12
第一節　概要 …… 12
第二節　西教寺住職アンケート …… 13
第三節　妙光寺住職・坊守アンケート …… 15
第四節　西教寺門徒調査 …… 18
第五節　妙好人『六連島のお軽さん』を訪ねる研修旅行参加者調査 …… 20
第六節　考察 …… 21
第四章　離島寺院の意義 …… 23
結論 …… 24
註
参考文献
参考資料

序論

寺院活動を行っていく上で、「人」という存在なしには活動すらできない。お寺を建築物として見るなら、本堂・本像・境内等の伽藍形式が現存していれば観光寺院として数十年は残るだろう。だが、伝道活動を基盤として活動していく寺院では伝道者と聴聞者がいないと成り立たない。さらに浄土真宗本願寺派は、修行や自力に頼る伝道活動は行わない。そう考えると浄土真宗本願寺派は、伝道活動を行っていく上で「人」（門徒・聴聞者）がいてこその寺院活動という定義になるだろう。

内閣府の令和元年の調査では、日本の人口は1億2617万人であり、65歳以上の人口は3589万人である。総人口に対する割合は、28.4%である。65歳以上の人口のうち、「65～74歳人口」は1740万人（総人口の13.8%）、「75歳以上人口」は1849万人（総人口の14.7%）である。[1]

この日本の社会情勢は、浄土真宗本願寺派門徒数にも比例するだろう。高齢者の割合が増えているのは現状であり、ここから推測できることは、将来、門信徒がゼロになる確率が高い寺院が多く存在している現状がわかる。それは都市寺院には数十年先、もしくは訪れない問題かもしれない。だが、地方寺院特に過疎地域寺院にはその問題が起き始めている寺院も多々挙げられる。本稿では過疎地域寺院特に「離島寺院」に着目し、現在起きている状況等を調査・研究を行い、離島寺院の実態や将来性をまとめていく。この研究が他寺院にとって一つの事例としてもらいたい。

本論文で取り上げる寺院は山口県下関市六連島西教寺。妙好人「お軽同行」を生んだ六連島として知られてい

る島である。研究過程は、六連島・西教寺の歴史、現地に足を踏み入れ西教寺の活動調査、島民の方々へのアンケートを主とする。第一に六連島・西教寺の成り立ちから始め、現在までの歴史をまとめていく。第二に、現西教寺住職、妙光寺住職・坊守に取材を行ったことをまとめていく。第三に現地に足を踏み入れ、島民に行った調査内容と結果をまとめていく。アンケートは、はい／いいえの回答式ではなく、自由記述欄を設け、各個人が考えていることを文字にしていただいた。最後に現在の西教寺の状況から推測できる将来を考察していく。

本論

第一章　六連島の概要と歴史

第一節　六連島概要

六連島は、響灘諸島地域に含まれ、人口は７６人、世帯数は２８世帯（表１－１）。面積は０．６９平方キロメートル、下関市本島から北西に約５キロの位置にあり、交通は竹崎港～六連島港間の航路が１日４往復。片道３７０円で、所要時間は２０分。主産業は花き栽培を中心に菊・ガーベラ・カーネーション等の生産が盛んである。また農業では野菜、水産業ではアワビ・サザエ・ウニ・ヒジキ。さらには、アルコール瓶詰めウニの発祥地でもある。スーパーやコンビニエンスストア、旅館、食堂等は無い。さらに教育施設・診療所・介護事務所も無

い。表1－1を参考に、古くは安政5（1858）年から令和6（2024）年までの人口を比較。一時期約500人いた人口は現在76人まで減少。古くから女性の割合が多い。166年で300人近い人口減少・過疎化が目に見え、将来が不安視される。山口県はこうした県内の離島の環境や状況を見直し、離島振興法に基づく山口県離島振興計画（計画期間令和5年度～令和14年度）を策定している。山口県の離島の社会情勢を見直し、離島が役割を果たしていくことを実現していくために取り組んでいる。さらには地域おこし協力隊や彦島地区まちづくり協議会等の活動団体も参入している。地域おこし協力隊は、就任後、六連島に在中し、島民との信頼関係、島外団体との事業拡大を狙い日々活動していた。彦島地区まちづくり協議会は、スタンプラリーの設置や六連島の整備・清掃活動、イベント主催などを企画し、六連島の環境保全と魅力を伝えている。

第二節　六連島の歴史

六連島に関する古い文献が数多く確認出来たことから、古くから注目されており、関係を持っていた機関、地域があることがわかった。

六連島の名前は「没利島（もつりじま）」、「毛都礼志麻（もつれしま）」、「縄島（もつれ）」、「牟都礼志麻（むつれしま）」、「牟都留能志麻（むつるのしま）」というように時代と共に呼び名が変化し現在の「六連島」に至る。この呼び名の由来は、諸説あるが、島に移住した6軒株を当てた。また、韓国語の「モッアール（集落）」の訛り語という説がある。間違えられやすいのは、六連島を含めた周囲の島が連なった様子を

表していることだが、俗説と捉えられている。[2]

伝承や参考文献を参考に六連島に初めて渡った人物については、現福岡県北九州市若松沖合洞海湾で合戦があったという。その合戦で麻生協左衛門尉高実が戦死し、その妻、紅姫と娘、於阡、於福と高實の弟、高房の4人が夜陰に乗じて小舟で脱出し六連島に漂着したとある。そのため、麻生協左衛門の一族により歴史が始まったと推測できる。しっかりと記録に残っているのは、麻生興左衛門尉高房が僧侶となり、元亀元年より天正8年に渡って石山本願寺の法難の際に、毛利藩小早川隆景の家来として従軍し、顕如上人に帰依。法名西教および阿弥陀如来の御繪像をいただき帰島したとある。戦国時代の16世紀末、六連島の対岸の幡生村より3軒、武久村より3軒が移住し、高房はこの6軒に島内の統治を行わせた。その6軒株は西村家・林家・目黒家・大司家・菅久家・城戸家である。[3]

その後六連島に注目は集まり、寛永12年頃には下関港が中継貿易港として発展し、六連島は貿易船を始め多くの関係を持つようになった。慶応3年には海外貿易船の安全面確保のため六連島に灯台の設置が決まり、リチャード・ヘンリー・ブラントン監修のもと新暦では明治4（1871）年1月1日に初点灯。翌年の明治5年には明治天皇の西国御巡幸実施し六連島に来島した。その後無線電話局・検疫所・税関監視所・植物検査所等の施設が建設され、貿易面で重要な島となった。[4]

一つの一族の開拓より人間が住み着いた歴史が始まり、島民が定着し自然・文化が咲き誇り、関係は島内にと

どまらず、全国から注目を浴びる島となったことが歴史を辿ると分かった。

第二章　西教寺の概要と歴史

第一節　西教寺概要

浄土真宗本願寺派海照山西教寺。六連島港から徒歩１５分、坂を上った中腹に西教寺はある。島のほぼ中心地に存在し、島民に親しまれている。本堂からは下関本土を眺めることができ、時期が良いと風通しもよく、自然に囲まれた本堂を体験することができる。浄土真宗では「六連島西教寺」というと「お軽同行」と連想する人も少なくないのではないか。本堂にはお軽同行に関する資料が残っており、西教寺の隣にはお軽同行の碑がある。六連島と共に発展しお軽同行亡き後には参拝者、研修者が訪れるという。過疎化に伴い現住職は下関本土に住むようになり、西教寺は無人寺となっている。そのため住職は、法事、法座、お盆・お彼岸参り等の際に帰島。自由参拝を推奨しており、本堂内には１２代住職真詮が手掛けたお軽同行の出版物、さらにお軽同行に関する映像で住職在中せずともお軽同行のことを学べる。

西教寺年間行事としては以下のものがある。

１月　元旦会（門徒のみ）

３月　春彼岸参り

８月　盆参り、夏法座
９月　彰彼岸参り
１１月　お取り越し報恩講参り
　お取り越し報恩講法座
１２月　除夜会（門徒のみ）

そのほか、年回忌法事、通夜葬儀、依頼があれば団参引き受けが西教寺のおおまかな寺院活動である。このように島内での法務が多いため、寺院の行事連絡は六連島の掲示板には記載されているが、口伝達で行われている。現在島外への宣伝はほぼしておらず、さらにはホームページ作成・ＳＮＳ活動等は現状行っていない。[5]

第二節　西教寺の歴史

麻生興左衛門尉高房が顕如上人に帰依し、法名西教及び阿弥陀如来像の御絵像をいただき帰島。そして天正９（１５８１）年８月に草堂を建立し海照山西教寺と号した。これが西教寺のはじまりである。のち寛永１１年３月６日に西教法師は７８歳で病死。その際、法名西向院釋西教淨乘法師。その後６軒株西村家の子孫西村萬三郎義房が剃髪し法名を西雲院釋恵秀と改め２代目となった。恵秀は７５歳で逝去した。[6]

そのため世襲が始まったのは２代目からで、西村家が住職を継承し、西教寺を存続させている。

３代目恵了、

４代目還教、
５代目麟浄、
６代目諦聴、
７代目教道、安政６年１２月再建。
８代目静光院釋悟常現道、お軽同行。現道には２人息子が生まれ、１人は９代目蓬山。２人目は大龍（西静）。
大龍は福岡県北九州市門司三光寺に入寺。
９代目桃花院蓬山遊戯、文政４年８月２５日生、明治２８年４月２３日７５歳で逝去。アルコール漬けうに発明。蓬山には３人の息子が生まれ、１人は等心。２人目は勝心、山口県萩市永正寺に入寺。三人目は深心、大阪金台寺に入寺しかし岡本道寿（深心）は帰島し、帝国皇道会設立、同朋運動展開。
１０代目法誓院釋真等心、明治１２年４月１４日住職継職。明治１６（１８８３）年１２月７日六連島大火により西教寺本堂全焼。阿弥陀如来のみ大火より逃れた。同１７年６月３０日に再建。
１１代目梅花院釋道朗、
１２代目六光院釋真詮、お軽同行を世に伝える。
１３代目西村義詮現住職と継承されている。
この歴史から、西教寺／西教寺住職・坊守は寺院での教化活動だけでなく、寺子屋、島民の公会堂的施設を担い、さらには島民の仲人、小学校の教師などを務めるほど島民の生活の中心であった。

上記でも記したが、現在住職西村義詮は下関本土で暮らしており、適宜六連島に帰島している。住職も高齢であり、1人での法務は困難である。そのため、血縁関係である妙光寺住職・坊守がサポートしている。そのため西教寺は現在3人で活動している。しかしながら14代目住職の後継者ははっきりとせず、現住職がいつまで法務を行えるかがポイントである。

第三節　妙好人お軽同行

この節では六連島で生を受け、信心を大切にし、念仏者として生きたお軽同行についてまとめる。「六連島のお軽」というと浄土真宗を信仰する方の中では耳にする人物であるのではないか。浄土真宗関係の文献だけでなく、六連島に関する文献の中でさえお軽同行の経歴や彼女が与えた影響を短くとも記載しているものが多い。それだけ世に影響を与えた人物だということがわかる。

「妙好人」とは、『佛教語大辞典』によると、まず「妙妙」をたえなること、「妙好人」を①念仏行者をほめていう語。②白蓮華のようなすぐれてよい人、とある。[7]

また、『浄土真宗聖典』註釈版では、第一に『顕浄土真実教行証文類』「信文類三」（末）では

分陀利といふは、人中の妙華と名づく、また希有華と名づく、また人中の上上華と名づく、また人中の妙好華と名づく。この華あひ伝へて蔡華と名づくるこれなり。もし念仏のひとはすなわちこれ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。[8]

とある。第二に、『愚禿鈔』では、「善導和尚は、「希有人なり、最勝人なり、妙好人なり、好人なり、上上人なり、真仏弟子なり」[9]とある。

第三に、『一念多念文意』では、

「当知此人是人中分陀利華」といふは、まさにこのひとはこれ、人中の分陀利華なりとしるべしとなり。これは如来のみことに分陀利華を念仏のひとにたとへたまへるなり。この華は、人中の上上華なり、好華なり、妙好華なり、希有華なり、最勝華なりとほめたまへり。光明寺の和尚（善導）の御釈（散善義）には、念仏の人をば、上上人・好人・妙好人・希有人・最勝人とほめたまへり。[10]

とある。第四に、『親鸞聖人御消息』では、

しかれば、この信心の人を釈迦如来は、「わが親しき友なり」（大経・下意）とよろこびましします。この信心の人を真の仏弟子といへり。この人を正念に住する人とす。この人は［阿弥陀仏］摂取して捨てたまはざれば、金剛心をえたる人と申すなり。この人を上上人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人とも、希有人とも申すなり。[11]

とある。第五に、『改邪鈔』では、善導の釈から

しかれば、そのむねにまかせて、祖師の仰せにも「それがしはまつたく弟子一人ももたず。そのゆゑは、弥陀の本願をたもたしむるほかはなにごとをしへてか弟子と号せん。弥陀の本願は仏智他力の授けたまふところなり。しかれば、みなともの同行なり。わたくしの弟子にあらず」云々。[12]

とある。さらに参考文献を要約すると、

妙好人は、『妙好人伝』が出版された江戸時代から広く普及された。妙好人の特色は、生死を超えた世界に生きており、本願力を信ずるとは三世に安住するということであり、過去世も未来世もよく知りうるという。三世を知るという点では、この世の最高の智慧者である。妙好人の本質は本願力に乗托して現世の不退転に住している者である。いいかえると、他力の安心に生きた人びと。[13]

としている。

お軽同行本名大森カルは、享和元（１８０１）年大森家の次女として誕生。幼少の頃から近所の男の子と遊ぶほど男勝りな性格で、自然豊かな環境の中で育った。幼少から西教寺との関りが深かったわけではない。島のお寺という認識で、しっかりと仏道に歩むまでは興味すら示していなかった。家父長制が根強く、男が外で仕事をし、女は家を守る役割というのがはっきりわかれていた。１９歳で向井幸七を養子婿としたが夫の不倫よる嫉妬や自己の無力さの苦しみのはて、仏縁に出会った。当時住職は第８代現道、弟超道（俳人）、現道次男大龍（歌人）、第９代蓬山との出会いで数え歌・発句・和歌の面白さにハマり、数多くの歌を残している。本堂での歌会、聴聞を繰り返すうちに、命の尊さ・生かされている喜びに気づかされ、残りの人生仏道に励んだ。現代まで「妙好人」、「お軽同行」が浄土真宗において親しまれているのは、自分に出来る最大限の念仏者の歩みをたどっていたからではないかと考える。現代と社会情勢、暮らしや生き方が違うのは確かにある。現在と比較して昔のことだからすごいことということではなく、その時代・生活において仏法を大事にし、念仏と共に生きた人という

意味で「妙好人」と呼ばれていると考える。それに、「妙好人伝」は弘化４（１８４７）年に発行されてお軽同行が生きていた江戸時代の発行物である。即ち当時においてお軽同行は浄土真宗内において影響を与える人物であり、生き様を讃えられた人である。多くの歌を残しているのはもちろんだが、その中には命（生死）に関わる歌があり、命の尊さを当時の住職・阿弥陀如来の本願を学び下関でも九州でも仏法に触れに行く姿に真の念仏者として捉える人が多いため親しまれていると考えた。本稿のテーマではないが妙好人の聖地に今も人が絶えないことは興味深く、研究対象にもなりそうだと考えた。[14]

第四節　考察

この章では西教寺に関して記述してきたが、「妙好人お軽同行」の影響が大きすぎると考えた。お軽同行が生きていた時代は、西教寺ありきのお軽同行だが現在はお軽同行ありきの西教寺のように感じる。前提にあるのは前者の方ではあるが、妙好人を訪ねる人も年々減少している現状を考えると現在の活動では寺院存続の限界が近く、手を打つ必要があるように考えた。ただ、本土ではなく島という立地に寺院が１５８１年の戦国時代から存在していることに着目すると歴史を感じられ、六連島の原点から現在までを共に生きてきているようで、六連島を表す象徴である。その象徴を活動していない「ただ存在している寺院」としてでは存在意義がない。そのため、住職の継職、法座・法要による本堂に集う行事の復活・宣伝、団体参拝引き受け、整備等は近い内に動く必要があることである。島民の門徒とは今までと変わらず法事・お盆・お彼岸でのお参りを一つ一つ丁寧に行い、関係

性を壊さないことが大切である。島外の人には「妙好人」の生まれた地として浄土真宗関係者の勉強会・研修場所としての活用が浄土真宗内での西教寺の認知度も増えるのではないかと考える。また、地元のサマーキャンプなど都会から離れた非日常の空間を味わう場所として歴史研修など様々な活用方法が挙げられる。時にはリスクを冒すことも必要かもしれないが、いっぺんに全てのことを行うと失敗する可能性が高いため、可能なことから一つ一つ実施していくことが望まれるだろう。

第三章　独自アンケート／質問紙を用いた調査

第一節　概要

この章では、２０２４年7月～9月にかけて3回実施したアンケート／質問紙を参照し、結果をまとめていく。対象は西教寺住職、妙光寺住職／坊守、西教寺門徒（２回）、お軽同行研修旅行参加者である。現地の声、島外からの声を匿名で募り、率直な意見をいただけたと感じている。第二節では西教寺住職、第３節では妙光寺住職／坊守、第４節では西教寺門徒、第５節ではお軽同行研修旅行参加者の声をまとめ、考察を述べていく。西教寺に親しみのある島内の声、今回研修で西教寺に訪れた島外の声により、西教寺がおかれている現状や課題、将来性も見えてくるのではないか。最初はアンケートなどの直接取材は考えていなかった。しかしながら私は今、こ

のタイミングで現地の声を聞くことに意義があると考え実施を決意した。みなさん快く受け答えてくださった。これは、現住職義詮の孫であるから得られた声なのかもしれない。浄土真宗総合研究所が行う宗勢調査やその他機関が行う調査には劣るかもしれないが、今抱いていることについて本音をうかがえたと感じている。これをただの調査ではなく、現在実際に存在している離島の寺院の現状として見ていただきたい。さらに現状を可視化するだけでなく、将来性を推測していく。

第二節　西教寺住職アンケート

第一に、西教寺住職にアンケートを実施した。回答日は２０２４年８月１２日。アンケート内容は、

① 西教寺は今後も六連島のシンボルだ　回答　はい
② 西教寺は今後も存続すべきだ　回答　はい
③ 西教寺に変化を求める　回答　はい
④ 西教寺に思い入れがある　回答　はい
⑤ 西教寺をより多くの人に知ってもらいたい　回答　はい
⑥ より多くの人に知ってもらうため何か考えがある　回答　はい
⑦ お軽同行を知っている　回答　はい
⑧ お軽同行に関して考えを持っている　回答　はい

③、④、⑥には自由記述欄を設けた。

まず③についてだが、島のご門徒も過疎化・高齢化となり、ご門徒も減少しつつある。お軽同行法要を願わくば復活して、島以外の浄土真宗ご門徒に広く聴聞・参拝してもらいたいと考えている。

次に④について、１５００年代より現１３代住職まで続く六連島西教寺を今後も護持発展し、持続継承してお念仏していきたいと考えている。また、妙好人お軽同行のご遺徳を後世に伝えていきたいと考えている。

最後に⑥について、まずはご門徒の皆様に参拝してもらいたいと考えている。その上で、行事を本願寺新報等のメディアに取り上げてもらい、広く知ってもらいたい。加えて、インスタグラム等で西教寺行事を発信するなども考えている。

西教寺現住職の活動、アンケート結果等の内容から、体が動く限りは西教寺の法務を行いたいという姿が見受けられた。島民のおかげにより西教寺が成り立っていることに感謝し、自分にできることがあるならば何度でも西教寺に帰り島民の声に寄り添う背中を肌で感じた。帰島し、西教寺に居る時間は年間日数にすると数日ではあるが、住職が帰島すると島民も島の中心人物が帰ってきたかのような安心感をうかがえた。それはやはり西教寺というのが六連島の中心的な場所・存在で古くから親しまれてきているからだと考える。法要では西教寺本堂に島民を一つの場所に集め浄土真宗のみ教えを共に味わう。お盆やお彼岸参りでは、西教寺と島民ひとつひとつの「家」との関りやつながりを再度認識することを大事にしている。西教寺はお盆やお彼岸参りは各家庭お参りしている。そのため、家庭ごとに思い出や先祖と西教寺のつながり等が異なる。西教寺側としては、法要等ではお

寺に足を運ぶ要因を作り、お盆やお彼岸参りでは各家庭とのつながりを再認識できる。だが、現住職がいつまでこの法務を務められるかが一番の不安視されることである。後でも記述するが、門徒側が考える西教寺課題点の上位に西教寺住職の後継／継承問題が挙げられた。現住職は８０歳を超え、下関本土との往復や六連島の坂道を歩くのは年々厳しくなるだろう。また、近年の夏場の気温上昇による真夏日が続くことを予測すると各家庭にお参りするのも困難になりそうだ。住職が年々門徒減少を一番目にし、実感しており、島民の門徒数を今後増やしていくのは厳しいと考えている。そのため、西教寺の存続には島外の力が必要不可欠という。その方法は、インターネット等の技術を使う事に賛成しているが、交信、宣伝は妙光寺に任せるつもりだ。離島という立地条件では本土の寺院以上に変化が求められる現代社会において、様々な企画案を考えられるが、実行するのに時間・労力・費用が発生する。西教寺の変化を希望していても実行できることはわずかなのかもしれない。

第三節　妙光寺住職・坊守アンケート

妙光寺は西教寺と関係が深く、西教寺現住職の娘が妙光寺の坊守である。そのため、両寺関係性をもった頃から、手を取り合いながら両寺発展のために今日まできている。

質問内容は、

①　西教寺の印象

②　西教寺に関して抱えていること

③　その課題をどのようにして解決したいか？
④　解決にむけて調べていること、取り組んでいること
⑤　もっとこうしたいなどの願望
⑥　逆にこういう将来にはなってほしくないこと
⑦　その他なにかあれば自由欄とし、妙光寺の二人には記述式での回答をお願いした。

まず、妙光寺住職は、現住職はもちろん、歴代住職・坊守の御尽力により阿弥陀様の他力本願のご法義が脈々と受け継がれ、ご門徒と共にお念仏を喜ばれている。また、江戸期の妙好人お軽さんのお寺として、今日まで１５０年以上に渡り、全国から参拝者が絶えず、六連島に居住し、ご縁のある方々の心の拠り所の寺院という印象を伺えた。昨今の社会状況に沿い、六連島の人口減少・少子高齢化が進み、世帯数門徒数の減少が顕著。産業・就労の衰退という地方都市の一課題に加え、離島という地理的条件が想像以上に影響している。これは今後、寺院存続に関わる重要事案である。

また、時期後継住職就任も喫緊の事案と捉えている。西教寺住職の体調を考慮し、今後も妙光寺の予定等を調整し、西教寺の法務を務めるという。現課題に対し、絶対的な正解はなく、全面的な解決、一個人の力では困難であるが、現状把握とその分析、関係者の意見等を聞き、危機感をもってご門徒・役職者と課題を共有し少しでも良い方向に進むよう適切な方策を取り組まなければいけないと考えている。

そのために、取り組んでいることとして、島内ご門徒の名前／家族／親族／家屋の位置あわせて島外に居住の

ご門徒の連絡先を確認している。春秋季彼岸会・盆会・御取越報恩講や各ご門徒の年回法要・通夜・葬儀・納骨等の仏事の際に丁寧に勤めると共に会話を重視し、意見要望を傾聴している。それが何かしら今後につながればと考えている。また、当該組や近隣寺院の意見等も参考にしていきたいという願望を伺えた。さらに今後の西教寺発展のために、お念仏ご相続のための取り組みとして文書・視聴覚伝道の導入やインターネットの活用、記念品やグッズ等の配布。妙好人お軽さんのさらなる顕彰、お軽さんを訪ねる参拝団の受け入れの充実に力を入れていくという声をいただけた。

さらに、坊守は、下関より定期船で２０分乗った離島で民家も４０軒ほどの土地条件下のほとんどが高齢者の門徒の協力で西教寺が成り立っている。今後の門徒数減少は厳しい現状と捉えている。門徒の高齢化・門徒数の減少・門徒の子供達との繋がりの希薄が今後の課題とし、不安視している。この課題に対し、なかなか現状解決策が見当たらず、法座を増やし、島外の方に西教寺法座に参拝してもらう。例えばお軽同行法座や団体参拝の引き受けによる参拝者増加が解決に向かう道ではないかと考えている。そのためには六連島お軽同行の存在を周知してもらう必要があり、今後の広報活動等が重要としている。西教寺の寺院活動が続かなくなる将来は望んでおらず、継続を希望している。若い方の提案等を活用し、今後の活動に生かしたいと望んでいる。

どちらも西教寺存続の危機を肌で感じ、門徒数の減少に伴う寺院活動が成り立たなくなることが一番危惧していた。六連島の人口減少を止めることは出来ないため、今いる門徒を大切にしつつ西教寺参拝者・団体の受け入れを狙い、独自の歴史と文化のなかで妙好人お軽同行を育んだ浄土真宗の土徳がある寺院を今後も存続させるべ

く、多くの人にお軽同行のみ教えを学んでもらう寺院にしていこうという計画をしている。

第四節　西教寺門徒調査

西教寺門徒を対象とした調査は2度実施した。一回目は2024年8月20日（23枚）、二回目は2024年9月23、24日に実施した（46枚）。

まず、一回目では23枚の回答があり、主に西教寺が存続すべきかの質問を実施した。寺院と門徒の関係は相互関係であり、切り離して考えることはできない。即ち門徒が存続を希望しなかったら廃寺という選択を取るべき将来を受け入れることも考えなくてはいけないが、21名が西教寺を六連島のシンボルと捉え、存続を希望している。この回答を得られた理由は、回答していただいた門徒の生まれる以前より西教寺は存在し、生まれてから現在まで一番身近なお寺であり、島の中心であったからだと考える。それに、前住職が六連島分校の先生であったということもあるが、19人が西教寺に思い入れがあると回答している。自分が育った場所という事もあり、存続を希望している割合が多い。ここでのアンケートで興味深いことは、西教寺に変化を求めるかという質問において、「いいえ」と答えた割合が多い。その割合は過半数を超えている。一定数、西教寺存続のためには今とは違う変化を期待し求めているが、この回答結果になったのは、島という自然に囲まれた環境で古風なお寺・本堂という歴史を感じる印象を消さないでほしいからではないかと考えられる。島のスタイルに合い、都会とは一味違う落ち着いた印象が島民にフィットし身近に感じられているのだと考える。だがしかし古風な本堂を残すだ

けでは存続とは言わないだろう。存続というには今まで以上に多くの人に西教寺を知ってもらい、訪れていただく必要がある。門徒の皆さまも行事や法要を増やし、お軽同行の出身地として多くの参拝者を望み、全国各地の寺院との関係人口を作るべきという。

次に二回目のアンケートでは、４６枚の回答があり、本稿では島民７６人の内４６人（２０２４年９月現在）を西教寺門徒として進める。この人数は島民の約６１％である。この数字を元に過去・現在・将来の人口、門徒数を推測したのが表１―２、１―３である。二回目のアンケートは記述をメインにした。西教寺の思いでと、未来像についてである。その理由は、人口が減少していき過疎化が止まらない門徒の声を聞けるのは今しかなく、自分にしかできない役目だと考えたから。また、西教寺発展のためには門徒の声と意見が必須で、文字として残した方が、強調性が出ると考えたからだ。一回目のアンケートを参考に、二回目では六連島・西教寺の未来像をより具体的に考えてもらった。未来像は高齢化で生活するには厳しい環境にはなると思うが、島から出て生活したいという声はなかった。即ち今後も生活できる場所であり、あわよくば観光業で活気のある島であることを望む声が多かった。

島民の意見を聞くと、西教寺は存続してほしいが、島民は増えることなくどんどん減少していく。島も活気にあふれた場所にするのは西教寺も行動してほしい。そしてその行動が結びつくと西教寺への参拝者も増え、西教寺存続へ繋がるのではと感じた。

第五節　妙好人『六連島のお軽さん』を訪ねる研修旅行参加者調査

この調査は、２０２４年７月２６日に門徒推進委員連絡協議会第５ブロック（豊浦組／下関組／小月組／豊浦西組）が主催し西教寺本堂でお軽同行研修が西教寺住職・妙光寺住職・坊守のもと行われた際に実施した。（５０枚）

初めに全体を見ると、六連島に初めて訪れた方の割合が多く、率直な意見がうかがえたと感じている。ただお軽同行についてこの研修以前より知っていたという割合は７割近くあった。六連島について独特な立地・環境である西教寺を昔ながらの雰囲気を味わえる状態の維持を期待する声が多かった。お軽同行の生涯、歌を西教寺の本堂で今一度学ぶことができ、生かされていることに感謝したい／ひとことひとこと味わい深く学べたという感想をいただけた。再度六連島・西教寺を訪れたいと思っている割合が多く、次回もお軽同行の法話を聴聞したいという。

男性も女性もお軽同行について、この研修以前より知っている人数が多く、認知度の高さが今一度確認できた。今回は下関市の組を対象としているが、今後対象規模を拡大するとより一段と妙好人／お軽同行についての研究が進むと考えた。他の妙好人の聖地へ訪ねたことがあると回答した数は半数あり、真宗の妙好人が親しまれていることが分かり、今後妙好人の研修・聖地巡礼等各該当寺院との連携、研修内容の向上（妙好人からありがたいことを学べる的なこと）が期待でき、妙好人が全国にもたらす影響を図ることができる。

第六節　考察

この章では私が実施した6つのアンケートをまとめ、西教寺に関係する多くの方からの意見をいただけた。今回は西教寺／浄土真宗に関係する方だけに実施したアンケートだった。衆徒以外の方にアンケートするとさらに深い調査になるのではないかと考えられる。だが今回の調査は、今までこのような調査を実施していなかった西教寺にとってこれからの時代生き残っていく上で大きな調査結果を得られたといえるだろう。大きな改善点から、すぐにでも進められる改善点を再認識でき、西教寺の将来の道筋が少し見えてきただろう。

多くの回答から西教寺を存続させていくということを決めた上で、ここからは記述していく。まず活動方法は、現在の活動内容では数年後も同じような境遇であるだろう。そのため、活動内容を見直すべきである。現在の年間行事に加えて、「妙好人お軽同行法要」や「妙好人お軽同行勉強会」など島民のみならず島外在住の人がお軽同行に触れる機会を作るべきである。また、団体参拝や団体研修など他寺院からの行事提案の引き受けも引き続き実施し、全国各地からの参拝者増加を期待する。

この活動を続けていくためには、六連島／西教寺が周知される必要があり、現代の発信ツールを用いて下関だけでなく全国、ましては世界へと発信していく必要がある。お軽同行の出版物の中には英訳されたものもあり、目に止まる外国人もいるかもしれない。さらには下関市・六連島での活動団体との関係を活かすと浄土真宗内だけでなく一般人にも西教寺へ足を踏み入れる機会づくりやお軽同行に触れることも望まれるだろう。

今後は西教寺、妙光寺と協力して西教寺発展のために実践へとフェーズが移行される。今構想案にあるのは3

つあり、

第一にＳＮＳ発信。西教寺はホームページ、ＳＮＳ活動を行っていまいため、今後開設の予定がある。そうすると携帯１つで西教寺の場所、外見、法要日程等の情報を現地に訪れる前に入手できる。また、連絡も電話だけでなくインターネット上で２４時間３６５日やり取りができ、離島という立地だからこそ情報の発信をしていく意義がある。

第二に新たな妙好人お軽同行の出版物の制作である。その理由は、西教寺前住職が出版された『妙好人おかるさん』は昭和５１年の９版、改編再販されたものでも平成１６年のものになる。新たな出版物を発行しても良い時期だと考えられる。さらに『妙好人おかるさん』はお軽の歌を載せているが現代語訳が無い。現代の人に知ってもらうためには現代語訳を掲載した方がよりお軽の気持ちや信心を分かりやすく出版物からも学べると考えられる。

第三に下関市、下関市内の活動団体とタッグを組み、寺院のスタンプラリーなどの市内の歴史的建造物・歴史ある寺院に参拝するイベント企画を発案していく。参拝者には参拝記念スタンプやお軽同行に関するパンフレット配布など参拝した記念になるものを提供する。

２０２４年度に開催された「しものせきしスタンプラリー」は西教寺にスタンプラリー設置はなかったものの、六連島には設置された。全体で４０３３人の参加者がいた中、２５６人が六連島に足を踏み入れた。（彦島地区まちづくり協議会直接取材より）この結果は、今後改善していけば六連島に訪れる人も増えていく可能性が高い

だろう。

第四章　離島寺院の意義

表1―3の今回の調査より、六連島の人口と西教寺門徒数を調べ、将来の人口数と門徒数を推測した。表1―2より5年で六連島の人口が13人減少すると予測し、数値化した。すると、25年後には人口が二桁ギリギリの数値であり、30年後にはマイナス表記になった。この結果から、今後30年が六連島の命と言えるだろう。門徒数も比例しているため門徒だけで活動していくには30年しかもたない。ただし、この数値は、あくまで現状で予想される推移であり、確実なものではないが、約20年から30年の間に、人口数がマイナスになるだろうと思われる。

このような結果から、離島寺院の意義を、島の歴史館的立ち位置にしていくべきだと考える。一番は門徒関係者の帰る場所として捉えてもらいたい。その理由は、現在も六連島には空き家があり、今後も増えていくことは人口推測から予測できる。

将来門徒が六連島では生活できなくなった時、六連島の人口が0になった時に、生活していた場所・時間を思い出してもらいたい。これが、私が考える離島寺院の意義だと考える。そして、これまでも六連島のシンボルと捉えられてきた西教寺を存分に活用し、今後もシンボルとして残っていくだろう。この案が進むと空き家の使い

道も格段に増え、農業・事業拡大、下関市の整備も行いやすくなるだろう。西教寺の本堂は今の状態を残すとし、庫裏の改築や西教寺近くの空き家を活用し六連島に関わる生活様式を保存する。西教寺が管理元なので管理者も存在し、六連島に島民が在中している間は島民の公民館的役割や休憩所、談笑場にもなり得る。活用方法は未知数だ。

結論

本論文でここまでの調査ができたのは、六連島島民・西教寺門徒をはじめ、下関市役所企画課の合澤氏、西本願寺寺院活動支援部佐々木氏、超勝寺住職大來氏、光源寺様、法珠寺住職加藤氏、未来の住職塾遠藤氏、元六連島地域おこし協力隊宮城氏、日本離島センター佐伯氏、浄土真宗本願寺派総合研究所那須氏、曹洞宗総合研究センター横山氏、築地本願寺など多くの方々のご意見を元にここまで進めてこられた。日本全国で寺院活動の縮小化が目に見えているからこそより離島の寺院の現状そしてこれからを危惧している印象であった。ただ、活動の仕方によっては多くの団体とコミュニティづくりができ、現代的な寺院にしていく必要、可能性が見えてきた。

第一章では、西教寺がある六連島について簡潔に紹介した。第二章では、西教寺の歴史と現状を簡潔ではあるが述べた。第三章では本研究にあたり独自のアンケートを用いた結果を述べた。第四章では、前章のアンケート

結果を元に西教寺の今後の存続意義について述べた。

ここまで述べてきたように、西教寺が今後も必要な存在であるという声が多かったため、廃寺にはせず、存続させていく。ただ、今の状態を維持するのは簡単だが、これでは存続していく意義がない。そのため、今後はより能動的に活動していくことが求められる。行政・民間団体と連携を保ち、西教寺だけの発展ではなく、六連島そして下関市の発展に繋がる行動だと考えるので、今後も調査対象とし、自らも活動に入り、研究を続けていくことを考えている。

２０２５年からは西教寺の認知度を上げるため、ＳＮＳ活動による場所、歴史、行事案内などの掲載。年間行事・法要は変わらず行いながらも団体参拝や研修の頻度を増やし、妙好人の生きた寺院、島、古風な雰囲気など六連島でしか感じられない時間づくりによる真宗伝道を実施していきたい。今後の第一段階と言える西教寺の認知を達成できた暁には、第二、第三段階の到達目標を掲げて今後も存続できるような活動を行いたい。

註

1 内閣府ホームページ「高齢化の現状と未来像」https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/s1_1_1.html 2024年11月閲覧

2 谷健二『島から日本が見えてくる―週刊日本の島―』第86号、ディアゴスティーニ・ジャパン、11～15ページ

3 大洲彰然『お軽同行物語』、百華苑、5～10ページ、安藤敦子『長州六連島の妙好人―おカル同行抄伝―』、3～4ページなどを参照。

4 安藤敦子『長州六連島の妙好人―おカル同行抄伝―』、1～2ページ

5 西教寺での現地調査に基づく情報である。

6 大洲彰然『お軽同行物語』百華苑、1955年、8～9ページ、真田新藏『硯海の楽土』飯田活版所、1909年、59ページ、松沢寿一、新川伝助、国分直一、中村省吾、高瀬増男「六連島村落の社会と生活」『水産講習所研究業績』294号、1960年、52ページ

7 中村元『佛教語大辞典』下巻、東京書籍株式会社、1975年、1303ページ

8 『浄土真宗聖典』註釈版・第二版、262ページ

9 『浄土真宗聖典』註釈版・第二版、538ページ

10 『浄土真宗聖典』註釈版・第二版、682ページ
11 『浄土真宗聖典』註釈版・第二版、748ページ
12 『浄土真宗聖典』註釈版・第二版、922ページ
13 五十嵐明宝『本願力の世界』彌生書房、1989年、8～40ページ
14 大洲彰然『お軽同行物語』を参照した。

参考文献

大洲彰然「お軽同行物語』百華苑、１９５５年
安藤敦子『長州六連島の妙好人　おカル同行抄伝』２００４年
谷健二『島から日本が見えてくる―週刊日本の島―』第８６号、ディアゴスティーニ・ジャパン
谷健二『島から日本が見えてくる週刊日本の島第８９号』、ディアゴスティーニ・ジャパン
桜井邦彦『人口減少寺院の底力　地方紙記者のインパクトルポ』興山舎、２０１８年
田中洋平『近世地方寺院経営史の研究』吉川弘文館、２０１９年
浄土真宗本願寺派「宗門の過疎対策」ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｈｏｎｇｗａｎｊｉ．ｏｒ．ｊｐ／ｊｉｉｎ／ｋａｓｏ．ｈｔｍｌ＃ｋａｓｏ―０１
宮本常一『郷土を見るまなざし：離島を中心に』宮本常一講演選集４、農山漁村文化協会、２０１４年３月２０日
高橋卓志『寺よ変われ』岩波書店、２００９年
安永雄彦『築地本願寺も経営学―ビジネスマン僧侶にまなぶ常識を超えるマーケティング―』東洋経済新報社、

２０２０年
相澤秀生、川又俊則『岐路に立つ仏教寺院―曹洞宗宗勢総合調査２０１５年を中心に―』法藏館、２０１９年
松本紹圭／遠藤卓也『みんなに喜ばれるお寺３３実践集―これからの寺院コンセプト―』興山舎、２０２１年
真田新藏『硯海の楽土』飯田活版所、１９０９年
教学伝道研究センター編『親鸞聖人７５０回大遠忌宗門長期振興計画―寺院活動事例集：お寺はかわる―新たな始まり―』宗門長期振興計画推進対策室、２００７年
松沢寿一、新川伝助、国分直一、中村省吾、高瀬増男「六連島村落の社会と生活」『水産講習所研究業績』２９４号、１９６０年
井口富夫『本願寺と門前町のにぎわい』永田文昌堂、２０１３年
星野哲『寺、再起動―「ゾンビ寺」からの脱出！―』法藏館、２０２２年
田村明『まちづくりの発想』岩波書店、１９８７年
橋本英樹『お坊さんが明かす　あなたの町からお寺が消える理由』洋泉社、２０１６年
佐々木正『妙好人の真実―法然、親鸞＜信＞の系譜』春秋社、２０１２年
中村元『佛教語大辞典』下巻、東京書籍、１９７５年
浄土真宗教学伝道センター『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』本願寺出版、１９８８年
五十嵐明宝『本願力の世界』彌生書房、１９８９年

小林皆真『山口県下各宗寺院細見』山口県青年会、１８９０年
中原郁生『六連島秘話』
櫻井義秀、川又俊則『人口減少社会と寺院―ソーシャル・キャピタルの視座から―』法藏館、２０１６年
下関市企画課『六連島パンフレット』
彦島地区まちづくり協議会『彦まちだより』第８号、２０２０年１０月
彦島地区まちづくり協議会『彦まちだより』第１０号、２０２２年４月
彦島地区まちづくり協議会『彦まちだより』第１１号、２０２３年４月
彦島地区まちづくり協議会『彦まちだより』第１２号、２０２４年３月
山口県「山口県離島振興計画（計画期間令和５年度～令和１４年度）
山口県下関市「離島の信仰を促進するための下関市における産業の振興に関する計画」平成３１年３月１８日
作成
『妙好人伝』法藏館、２００９年
朝枝善照『妙好人伝基礎研究』永田文昌堂、１９８２年
朝枝善照『続　妙好人伝基礎研究』永田文昌堂、１９９８年
七里恒順ほか『親鸞に出遇った人びと１～５』同朋舎出版、１９８９年
菊藤明道『妙好人伝の研究』法藏館、２００３年

菊藤明道『真の仏弟子　妙好人』探究社、２０１０年
西村真詮『妙好人おかるさん』六光会、２００４年
石田法雄『妙好人おかるの歌』永田文昌堂、１９９１年
安藤敦子「妙好人お軽―六連島の灯」
「お軽同行：山口県下関市六連島」ＳＮＡＩＬ　ＡＶＭ―ＴＶ　ＰＲＯＤＵＣＴＩＯＮ、すねいる教材研究社、２００７年
「本願寺山口別院　妙好人・六連のお軽さん」https://www.yamaguchibetsuin.net
内閣府ホームページ「高齢化の現状と未来像」https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/s1_1_1.html
２０２４年１１月閲覧

<表１－１>

<表 1－1>　六連島住民基本台帳

調査年	人口（総数）	人口（男）	人口（女）	世帯数
令和 6 年 8 月 31 日	76	３２	４４	３８
令和 5 年 8 月 31 日	79	34	45	40
令和 4 年 8 月 31 日	87	38	49	45
令和 3 年 8 月 31 日	86	38	48	45
令和 2 年 8 月 31 日	85	38	47	43
令和元年 8 月 31 日	89	38	51	42
平成 30 年 8 月 31 日	94	39	55	46
平成２９年 8 月 31 日	93	39	54	44
平成２８年 8 月 31 日	95	38	57	44
平成２７年 8 月 31 日	103	40	63	47
平成２６年 8 月 31 日	106	43	63	47
平成２５年 8 月末	113	48	65	50
平成２４年 8 月末	110	47	63	47
平成２３年 8 月末	115	50	65	49
平成２２年 8 月末	117	50	67	48
平成２１年 8 月末	115	50	65	46
平成２０年 8 月末	115	50	65	46
平成１９年 8 月末	115	49	66	44
平成１８年 8 月末	118	52	66	43
平成１７年 8 月末	128	57	71	42
昭和 63（1988）年	238			51
昭和 10（1935）年	360			62
明治 42（1909）年	464			65
安政 5（1858）年	335			58

<参考文献>

・山口県住民基本台帳人口（下関市ホームページ）2024 年 9 月 28 日閲覧
https://www.city.shimonoseki.lg.jp/soshiki/134/1189.html
・「人口推計」（総務省統計局）2024 年 9 月 28 日閲覧
https://www.stat.go.jp/data/jinsui/index.html
・『六連島秘話』中原郁生

<表1-2>指定年との比較

年代	人口	何年後	人口増減	人口密度（人/㎢）＊0.69㎢	門徒数推定人数＊島民の61%	門徒数増減	人口密度
安政5（1858）年	335	0	0	485.5072464	204.35	0	296.1594
明治42（1909）年	464	51	129	672.4637681	283.04	78.69	410.2029
昭和10（1935）年	360	77	-104	521.7391304	219.6	-63.44	318.2609
昭和63（1988）年	238	130	-122	344.9275362	145.18	-74.42	210.4058
平成17（2005）年	128	147	-110	185.5072464	78.08	-67.1	113.1594
平成22（2010）年	117	152	-11	169.5652174	71.37	-6.71	103.4348
平成27（2015）年	103	157	-14	149.2753623	62.83	-8.54	91.05797
令和2（2020）年	85	162	-18	123.1884058	51.85	-10.98	75.14493
令和6（2024）年	76	166	-9	110.1449275	46	-5.85	66.66667
安政5年からの推移	-259	166	-259		-158.35	-158.35	

<表1-3>将来人口推測

年	人口	人口密度（人/㎢）＊0.69㎢	門徒数	人口密度（人/㎢）＊0.69㎢
令和6(2024)	76	110.1449275	46	66.66666667
令和11（2029）	63	91.30434783	38.43	55.69565217
令和16（2034）	50	72.46376812	30.5	44.20289855
令和21（2039）	37	53.62318841	22.57	32.71014493
令和26（2044）	24	34.7826087	14.64	21.2173913
令和31（2049）	11	15.94202899	6.71	9.724637681
令和31（2054）	-2	-2.898550725	-1.22	-1.768115942

(人口)2005年からの数より5年で13人減少とする

表2-1

<表2-1>西教寺門徒アンケート			
1、西教寺は今後も六連島のシンボルだ。		はい	いいえ
2、西教寺は今後も存続すべきだ。		はい	いいえ
3、西教寺に変化を求める。		はい	いいえ
4、西教寺に思い入れがある。		はい	いいえ
5、西教寺をより多くの人に知ってもらいたい。		はい	いいえ
6、より多くの人に知ってもらうため何か考えがある。		はい	いいえ
7、お軽同行を知っている。		はい	いいえ
8、お軽同行に関して考えを持っている。		はい	いいえ

質問1	人数
はい	21
いいえ	2
合計	23

質問2	人数
はい	21
いいえ	1
回答無し	1
合計	23

質問3	人数
はい	7
いいえ	15
回答無し	1
合計	23

質問4	人数
はい	19
いいえ	2
回答無し	2
合計	23

質問5	人数
はい	19
いいえ	2
回答無し	2
合計	23

質問6	人数
はい	5
いいえ	11
回答無し	7
合計	23

質問7	人数
はい	23
いいえ	0
合計	23

質問8	人数
はい	6
いいえ	13
回答無し	4
合計	23

西教寺本堂写真（撮影著者）

お軽碑の写真（撮影著者）